

大学はどうく

大競争時代

▶4◀

「講義は、なるべくしたくや授業をしても教育効果はくはない」。十月中旬、上がらない」と宇佐美教授

千葉大教育学部の後期科目「道徳教育」の二回目の授業。宇佐美寛教授は、こうした書き出しで始まる授業の進め方をまとめたプリントを学生に配った。

「講義は、なるべくしたくや授業をしても教育効果はくはない」と宇佐美教授は説明する。

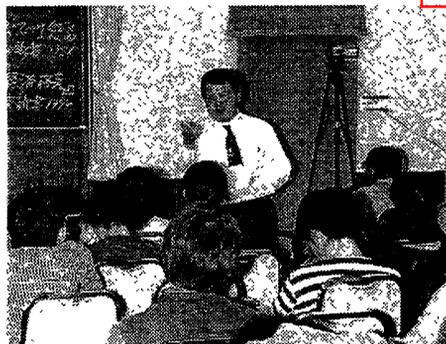
受け身の学生変える

学ぶ技術から指導

一方的に話す「講義」はしないという授業は、大人数でも教科書の予習を前提とした短い質問をし、指名して答えさせながら進められる。教室は緊張感に包まれ、私語や居眠り姿はない。レポートの宿題はほぼ毎回。教科書とは別に十冊以上の課題図書もある。

「きちんとした文章が書けない。教科書に載っているから」と、谷崎潤一郎を知らない。そんな若者が大勢大学に入ってくる。中央大商学部の古本耕二学部長補佐も学生の基礎学力に危うさを感じている。

「学生の受け身の姿勢をただし、最近、低下が目立つ文章表現力や知識量を補う工夫をしなければ、もはや育をするには欠かれない」



と言いつ切る。講座では、新聞記事などを教材に文章の書き方や図書館の利用法などを指導。最終目標は入学前に「新書」を読めるようにすることだ。

一方、ある私立大の学生課長は「小手先の補習に頼るだけでは限界がある」と話す。低下が指摘される学力や学習意欲、あいまない進学目的……。大衆化した

大学が直面する課題は、東京大をはじめ六校に「講義の実施している補習授業など」の「対症療法」では解決できない問題を含んでいる。

兵庫県三木市。開校二年目の関西国際大は、厳格な課題もある。浜名篤教授は「成績の悪い学生ほど学習支援も始めた。これまでの具体的なエピソードを交えた方が反応が良いことなどが確認されたが、それだけで授業効果は上がるわけではない。三年間、授業を担当した田中実教授は「三分の一程度の学生は単位を取る目的だけで受講しており、一年かけてその意識を変えられたという実感はあまりない」と振り返る。

成績評価(GP A)と徹底した学習指導に大学全体で取り組んでいる。高校レベルの英語や数学などを教える「学習支援センター」で

ビデオカメラで学生の反応を記録(京都市左京区の京都大学)

入試で学生の質を管理する時代は過ぎ去ろうとしている。多様化する学生の資質や意欲に大学はどのように対応するか。また出ぬ答えを求めて、教育内容の問い直しは続く。